モラルサイエンス研究会（令和元年７月３日）発表要旨

「進化」という視点が道徳にもたらすもの
―主に道徳の起源・位置づけと教育・実践の関係について―

教育研究室
教授　宗　中正

廣池千九郎は『道徳科学の論文』において、宇宙の働きには原理や法則があること、宇宙の内容が系統的であり連絡していること、宇宙現象の一つである人間はその法則に支配されていると同時にその生成化育の働きの恩恵を受けていることを示した。また、自己保存の必要から生まれた人類の道徳は、変化する時代と環境への適応の過程を経てきたが、今後人類が生存し発達するためには、人類の道徳は更に進化する必要があることを指摘した。

Dennis . L. Krebs が The Origins of Morality―An Evolutionary Account (2011) において示したように、道徳を進化的に捉える見方は、進化科学において目覚ましい発展を遂げており、道徳研究の今後の方向性を示すものとして注目されている。

廣池がそうであったように、進化科学においても、道徳を「自己保存」と「環境への適応」の視点から捉えている。また、現在において「利己的」とされる人間の性質の多くが、進化の過程において適応的役割を果たしてきたことを具体的に示している。進化という視点は、私たちが道徳的存在としての過去と現在を省みる上で、また今後の人類が適応的に、調和的に歩むための本質的な視点を提示している。